

山本一清博士の葬儀・慰霊祭について

—三大宗教による人生三度の葬儀—

坂井義人

1 はじめに

山本一清博士は、明治期の青年時代、時のインテリジェンスの流行を反映して、キリスト教徒として洗礼をうけたことは良く知られている事実である。そして、永く禁教の憂き目を受けたキリスト教は、各教派ともに日本全国に急速に広がりを見せ、現代のわが国では、神道、仏教そしてキリスト教と三大宗教とも謳われて、隆盛を誇っている。ところで、山本師は生涯をかけて天文学の推進役を担われたが、その根底には、宗教との関係が所どころで垣間見られ、そして逝去の直前の大転進として、神道系（教派神道）の宗教団体・三五教団（アナナイ教）に進んで関係を構築されていった。

このあたりの事実関係とその評価は、筆者拙稿その他でも、アーカイブ研究の一端として、少しずつ明らかになりつつあるが、その入り口とも言うべき宗教観と逝去後の事実関係は、今もって全てが明らかとなっているとは言いがたい。前者は特に今後の研究に待つべきであるが、後者は興味深い事実として、京大・山本資料その他から興味深い事実が明らかになって来た。本稿では、逝去後に三大宗教に送られたご葬儀に関して、それらの紹介を意図するものである。



写真1 60歳代の山本博士



写真2 生涯の46センチ望遠鏡

2 山本博士逝去後の葬儀について

山本博士は、昭和34年1月16日、滋賀県草津のご自宅で逝去された。享年70歳。逝去直前には、アナナイ教団との関係からそれらの一端を任された亡父・坂井義雄も病氣見舞いに訪れている事は、長男たる筆者には亡父より聞かされてもいた。それらの詳細は東亜天文学会の山本博士逝去の報を知らせる機関紙・天界に詳しく語られている。

ご逝去後には、翌日1月17日に大津市斎場にて火葬され、親族のみの密葬として送られた。山本師は「・・・わしゃ熱いのは嫌だから、火葬にはせんでくれ」と常々語られたといい、土葬も未だ続いていた時代でもあり、その意味ではお気の毒でもあったか、これも知られざるエピソードなのかも知れない。そして、ここから山本師らしい華々しいというべきか否かは何とも言いがたいが、三大宗教による続けての天国便が用意された。

人の一生を締めくくる葬儀というものは、筆者も両親の折、送り人としての経験はしたが、流石にこのような経験は考えるに及ばない。敢えて、自身の将来の葬儀は無用と思うくらいである。山本博士の人生は豪華絢爛とも言うべきものである。それは、若き日より宗教的関心の裏打ちとも感じられる。博士にとっては、天文学は宗教との関係を認識すべきものであったといい、その証言等も発掘され始めている。その意味では、博士の人生観の表現とも言うべき葬儀は、それを語り尽くしているのかも知れない。人生とは最後の

瞬の輝きにこそ全てが集約され、その意義を求めるべきものかも知れないという思いを益々抱きつつ・・・。

3 葬儀の時系列

山本師の葬儀の具体的事象としては、以下のように要約される。一見して、目まぐるしいとも言える絢爛さである。仏教と神道との関係は、神仏集合論的には、何とか理解はされる。(これとて、教学的には時代を経ての事であるが)しかし、キリスト教徒としての師の顔と、神道系への傾倒の横顔とは、未だに論議は絶えない。悪口を言えば山本師の人生最大の汚点とも言われも続けてきた。そのような評価を踏まえて、以下を観測いただきたい。どうすればキリスト教と神道系アナナイ教との両立が山本師の頭脳には存在したのか、一朝には結論は難しい。今はそのように評価をしておきたい。

- ・ 逝去 昭和 34 年 1 月 17 日 大津市斎場火葬
- ・ 同年 1 月 18 日 日本キリスト教団草津教会葬儀
- ・ 同年 1 月 21 日 田上村等関係者仏式本葬(真言宗東本願寺・大谷派) 院号戒名 『撰取院釈一清』
- ・ 同年 3 月 9 日 三教団神道形式慰霊祭(アナナイ中央天文台・台長として慰霊)

4 キリスト教葬儀

キリスト教徒として山本師の正式葬儀は、昭和 34 年 1 月 18 日、即ち逝去二日後に執り行われた。日本キリスト教団・草津教会に関係者は参集した。錚々たる人士が集まれ、その模様は当時の特集号天界誌を参照されたい。これをもってキリスト教徒としての面目は保たれ、若き日からの思想と心情と親交友情にも対面を保たれた事を示している。既にご遺体は火葬に付されていたので、今で言うお別れの会とも言えるのかとも思われる。

今回のこの葬儀以外の事跡は、世間への形式的対面というべきものなのかも知れない。その意味では、これを以ってキリスト教徒の師は、神の御許に召されて昇天をされたことは正式に認められた事である。



写真 3 佐野牧師による説教



写真 4 キリスト教祭壇・草津教会



写真 5 葬儀参加者による慰霊頭花



写真 6 葬儀参加者各位

5 仏式葬儀

仏教形式の葬儀情報は、筆者は殆ど得ていない。当時の天界誌には、反射鏡研磨の達人「木部成麿氏」が、真宗木部派の代表僧侶でもあり、戒名その他に対しての師への畏敬的

な行動をされた事が記憶されている。これは本来、仏教徒的な意志を山本師が持ち合わせておられたか否かは不明ながら、しかし乍ら名士としても地元有力者というお立場から、仏教的対応も地元には必要とのご令室ご子息のご判断の結果、近隣の寺院での地元の関係者への案内挨拶としてとして執り行われたようである。山本遺品には仏教形式の当日写真等は散見されず、当時の模様はこれ以上の言及は、今のところ困難である。

ただし、大変に印象深く傑作なのは、やはりその院号とご戒名である。見事に師の来歴と一見して「・山本先生だ」と分る号戒名となっている。筆者には、『撰取院』という院号に勤勉と真摯と大いなる警醒家・・・そして、何にでも関心を寄せて取り込んでいく人格が見事に現されていると感じた次第である。そして『一清』は本名そのもので、一星と望まれたのではなかろうかとも訝しくも感じる次第である。一星としたならば、未だ当時は認識も低かったブラックホールにも繋がり、これは冗談か・・・とお叱りを受けかけない。しかし大変に心楽しい、素晴らしい院号戒名である事は、多分間違いない・・・。

6 アナナイ教と神道慰霊祭

昭和 32 年から、アナナイ中央天文台長として職責を続けた山本師は、教団側との意見相違等にて逝去の前年に一時帰郷をし、その後に病魔の発現となって、そのまま静養中に逝去された。教団天文台の台長として在籍が続いたままであり、台長慰霊祭としての格式で葬儀に等しい神道形式の祭事が実施された。山本家からの依頼による葬儀ではなく、会社社長が他界し、社葬と同様の扱いではないのかという第三者的見解は正しい。

翻って山本師の教団との関係、その途上としての意見相違、それらが山本師とアナナイ教団との決定的決裂と見るか否かは、早計に定かたすべきではない。写真 13 に示す教団山本博士慰霊祭事は、清水市教団本部にて三柱の主宰神(大神様)、五柱の陪神、および史的賢人の祭られる主祭殿に列せられ最大畏敬慰霊祭であったと言う。かかる対応は例を見ないと言ひ、後顧の問題として、アナナイ中央天文台に残されたままのカルヴァー46センチ望遠鏡の処理案件は浮上したとは言え、教団側の姿勢は讃えられるべきである。

その後、亡父・坂井義雄は、ご令室・英子先生よりのご指示と思われる売却意思に従い、教団に有償譲渡を打診したらしき報告の坂井書簡も見つかって、教団側は取得経費に問題があり、結局山本家に返却せざるを得なかったという事情も発掘されている。

確かに、アナナイ神道形式慰霊祭は、教団独自の立場であろう。それは認め、ご令室様は慰霊祭出席は無かったと結論される。しかし、その模様の式典写真は教団から山本家に送られ、真摯なる挨拶状も見つかっている。それらの前後写真を以下に掲げる。



写真 7 教団一行の花山天文台訪問・昭和 31 年 12 月



写真 8 山本師と開祖

写真 7 と写真 8 は、教団関係者とアナナイ教開祖を京大・花山天文台案内時のものであり、言わば蜜月時代のはじまりを意味する。この天文台訪問の少し前、中野開祖は滋賀の山本師宅を訪問し、山本師はその迫力と見解及び宗教と天文の表裏性について、深く意見を交え、師の年来の学問への疑問について思いを致す事があったという。これについては、

いずれ稿を改めるとして、この後の数年後に死が両者の袂を分かち契機となっていく。以下に、その意思の推移と両者の関係を物語る生前の写真資料を示し、最後に教団の神道形式慰霊祭へとその展開を繋げていくこととする。



写真9 神官衣装着付け



写真10 神官衣装着付け (沼津市内)



写真11 神官衣装



写真12 祭事馬上



写真13 祭祀女官



写真14 獅子舞祭事

写真9から写真14までは、二年後に他界をされる前の山本師とその関連写真である。この写真のみを見れば、既に山本博士は神道神主祭官としか言いようもない。昭和32年9月22日当日を物語る、中央天文台麓の沼津市内で繰り広げられた天文祭りの折の光景である。アナナイ教団に単にゲストの立場でのオブザーバーとも見えぬことも無い。これだけを示しても、結論とかご心情を明らかとすることは不可能である。山本師の神道系への興味喚起は当然ながら、かかる傍証的な事柄のみでは、決してそれらを明らかにすることは出来ない。これは今後披瀝を期待される、教団関係者とか山本師の直接的行動とその記録来歴を以って結論化すべきものである。

アナナイ教団に於ける神道祭祀は、昭和34年3月9日とあるが、それは以下に示す教団よりの慰霊祭事終了の挨拶状に由来する。僅か昭和32年から二年ほどの幕切れを意味するが、より詳細なる資料と証言の採取を必要とする評価へと繋いでいく事を期待すべきでもある。

山本家からの慰霊祭参加は無かった模様であるが、中央天文台長・山本一清博士への教団側の畏敬と尊崇は一定の評価はなすべきであろう。なお、この後に博士遺愛のカルヴァー46センチ望遠鏡は永き旅路を彷徨うこととなっていくのであるが、それらの末に平成の時代の今後は日本国内での扱いは、かかる敬意と畏敬と、またその道行きを知らぬ者には、扱いの資格はないものと断じておく。一連の山本博士の特に最晩年の行動とその意思と遺

志は、何にも増して理解すべきであり、三尺下がって師の影踏まず・・・を、そのテーゼとしておくべきものであろう。



写真 13 山本一清博士神道慰霊祭（教団本部）



写真 14 慰霊祭挨拶状

写真 14 に記載されてある内容について特に紹介しておきたい。手書き文面の採録であり、簡潔な内容であるが、博士への畏敬の念は十分に汲み取れる。

「春暖の候となりました。去る九日本部道場において山本先生の慰霊祭が盛大に 執行されました。その模様を写しました写真一葉御同封申し上げ、謹んで亡き先生のご功績を偲ぶと共に御冥福をお祈り申し上げる次第です。本部諸先生方何卒よろしく申し上げてくれとのご伝言でございました。奥様のご健康をお祈りしています。

3月13日 ご令閨様

三五教写真部」

7 結語

生涯を終えるに当たり、山本博士に対しては三回もの葬儀慰霊祭が執り行われた。それぞれの宗教感と死生感に基づく儀式は、それ自体何にも増して美しい。故人を偲んでなお余りある感慨をもよおすからである。少し感慨を述べれば、日本人の自然観、そして宇宙観において、神道という独特の美しさと思いを保ってきた。何ゆえ博士は、アナナイという神道系の天文学を標榜する団体と関係を保ったのか、現在の所そのご心中までは計り知る事は出来ない。一見破局に向かったように見える両者の関係は、博士の死を以って全てを終焉に向かわせた。しかし未だその遺志は消えていないと感じるのは無理であろうか。科学と宗教は登り口の違いだけで、達するところは同じという信念を山本博士は持っておられたという。その意味では、博士は三つの宗教と天体科学という四つもの登り口が見えていたのだろうと今は思いたい。そして三度の葬儀は全てにおいて、博士には受け入れておられたとも信じたい。個人的見解では、その波乱を含んだままの死すら、それは大変に美しい・・・と、感じてやまない。最後に後ろ髪を引かれたであろう中央天文台の博士所有 46 センチ望遠鏡機材と、そしてその前後に教団独自の路線を含めて、各地に作られた天文施設を紹介し、本稿を終える事としたい。

付録 アナナイ系各所天文施設について(昭和 32 年当時以降・月光天文台調べ)

- ・ 天文暦算局 静岡県清水市 11 センチ屈折(国治天文台へ移設)
- ・ 中央天文台 静岡県沼津市 46 センチ反射(山本家返却) 16 センチ屈折 函南移転
- ・ 西部天文台 福岡県筑後市 20 センチ反射 16 センチ屈折 九州天文台と改称
- ・ 四国三縄天文台 徳島県池田町 20 センチ反射(眉山天文台へ移設)
- ・ 眉山天文台 徳島市眉山山頂 20 センチ反射 16 センチ屈折

- ・ 奥州天文台 福島県二本松市 16センチ屈折
- ・ 国治天文台 愛知県岡崎市 11センチ屈折 16センチ屈折に更新
- ・ 濃尾天文台 岐阜県多治見市 20センチ屈折
- ・ 東北天文台 岩手県北上市 21センチ反射
- ・ 肥之国天文台 熊本県山鹿市 16センチ屈折
- ・ 信濃天文台 長野県岡谷市 22センチ反射（老朽現存）

中央天文台は函南町月光天文台に継承、西部天文台(九州天文台)以外施設廃止



写真 15 アナナイ系天文施設



写真 16 沼津市アナナイ中央天文台 46センチ望遠鏡